

- (4) 立派なわい性台苗木は、フェーザの多く出たものである。またフェーザは水平に出すようにすると、花芽の着きもよく、早期結実に結びつく、そのためには、3年ころまで誘引が大切である。

2 りんごわい性台木M9について

本県でのわい性りんご台木については、わい性の程度や土壌の適用範囲などから、わい性台ではM26、半わい性台ではM7、MM106をすすめているが、とくに土壌や気象の状態から一部にM9の使用もみられる。この台木はウイルスの保毒台木であり、この台木の扱いは次の点に注意する。

- 1) M9=これは数種のウイルスを保毒しており、この台木を使用した苗木は、品種によって生育を損なったり、欠株を生じることがあるので、予備苗を多く準備しておくことが望ましい。この台木の繁殖に際しては、台木根の発生が悪く、実生台などを用いる場合でも、培土や水管理など、発根し易い土壌環境をつくってやることである。つがる/M9は衰弱、枯死する例(長野、岩手)が起っている。
- 2) M9A=これは数種のウイルスに対し、無毒株である台木のことである。またこの繁殖は取木によるのがよい。

現在、種苗業者が育成した苗木で、M9Aと呼ばれているものに、次の2種がある。

- ① 熱処理をしてCLSV無毒として実生台や、丸葉台に接いでいるもの。
- ② M9Aと称する台を実生台や、丸葉台に接いだもの。

これらは本来のM9Aと異なり、CLSV以外のウイルスは保毒しているおそれがある。したがってこれらの台木は、いずれもM9台と同様、生育、結実、収量など本来のM9Aと異なるようであり、購入に注意するとともに、繁殖にあたっては、発根しがたいので、土壌環境をよくすることが大切である。

3 52年度りんご病害虫防除暦に採用した農薬の特性と使用法

最近の果樹農薬は病害に対する抵抗性の問題や、安全使用基準等の関係から大巾に規制されつつある。また数種の病害に対して効果の大きい農薬は少くなり、ややもすれば特効薬的存在のものが多い。従来のもに比較してその効果が高く、新しく普及に移した農薬は、つぎの3種である。

(1) ジマンダイセン水和剤(マンゼブ剤)

- ① 特性=赤星病や黒星病、黒点病などに対して高い防除効果を示す。残効期間は7-10月ぐらいで、薬害もなく、予防効果が高い。
- ② 使用法=赤星病を対照に600倍の濃度で開花直前に1回散布するが、この時期には黒

星病も同時防除が可能である。

- ③ 使用上の注意=石灰ボルドー液、銅製剤、石灰硫黄合剤、などのアルカリ性製剤との混用はさける。なお本剤の適正使用基準は収穫60日前まで3回以内である。

④ ジマンダイセン水和剤試験成績

(岩手県園芸試験場)

供試薬剤	使用濃度	第1回調査(7月30日)			第2回調査(9月4日)			総合的 最終評点
	希釈倍数 Hm	調査 葉数	病葉率 (%)	10葉当り の病斑数	調査 葉数	病葉率 (%)	10葉当り の病斑数	
ジマンダイセン(9回)	600 400	949	9.3	1.2	1,823	8.9	1.4	4
キノンドー(9回) (対照)	600	1,042	8.3	1.1	1,766	10.8	1.7	5
オーソサイド(9回)	500	855	9.4	1.3	1,628	9.3	1.3	6
無散布(ベンレート)	—	881	57.3	13.0	1,700	85.1	37.8	0

※(註)

総合的最終評価……9月23日に斑点落葉病およびその他の病害(褐斑病、すす斑、すす点病、黒点病、葉害などを各区について比較し評点した。評点の基準は無散布を0、対照区のキノンドーを5とした。

(2) ダイボルト水和剤(チユウラム30%、ジラム50%)

- ① 特性=黒点病、すす斑病、すす点病など幼果期に発生する果実病害に対する防除効果が高い。斑点落葉病に対しては少発生時には有効であるが、多発条件下では劣る。葉害はない。
- ② 使用法=600倍の濃度で5月下旬、6月上~中旬および6月下旬の3回散布することができる。
- ③ 使用上の注意=アルカリ性の薬剤や、銅製剤との混用、接近散布はさける。魚介類に対する毒性が強いため注意する。適正使用基準は収穫45日前まで8回以内である。
- ④ ダイボルト水和剤の試験成績

(岩手県園芸試験場)

供試薬剤	使用濃度	7月29日調査			9月8日調査		
		調査 葉数	発病 葉率	10葉当り 病斑数	調査 葉数	発病 葉率	10葉当り 病斑数
ダイボルト水和剤	600	727	3.2	0.4	1,175	23.1	3.9
{ エスレル加用	5,000						
{ スパートサイド水和剤(5回)	800	658	2.0	0.3	1,069	7.0	1.0
{ トモオキシラン (4回)	500						
{ ダイカモン (3回)	500						
{ トモオキシラン (6回)	500	731	1.8	0.2	1,052	7.2	1.0
(対照)							
無散布 (インド)	—	377	50.7	13.9	457	99.6	—

(3) ポリオキシリン水和剤 (ポリオキシリン複合体Bとして5%、ヒドロキシキノリン銅45%)

① 特性=ポリオキシリンALは斑点落葉病に対して、孢子発芽阻止、菌糸生育阻止および孢子形成阻止の効果が高く、殺菌力がすぐれている。また最近ポリオキシリンALの単剤連用散布によって耐性菌の出現しているものに対しても、ポリオキシリン水和剤は、有効な結果が現れている。

② 使用法=1000倍の濃度で、7月下旬～9月上旬まで主として斑点落葉病の防除を目標に数回散布する。

③ 使用上の注意=アルカリ性の薬剤との混用および接近散布はさける。ジネブ剤との混用は薬害のおそれがあるのでさける。落花直後から20日頃までの散布は効果にサビを生ずることがあるのでさける。ポリオキシリンに対する耐性菌の出現をさけるため、ポリオキシリンを含有する製剤は年間散布4回以内に止めることが望ましい。

④ ポリオキシリン水和剤試験成績

(岩手県園芸試験場)

供試薬剤	倍数	発病 葉率	発病 果率	1病果当り 斑点数	サビ果率 (%)		
					大	中	小
ポリオキシリン	1000	16.2%	2.2%	1.5	0	2.2	4.4%
ポリオキシリンAL	1000	7.1	0	0	0	1.0	3.0
モノックス	600	72.7	8.0	1.1	0	0	0
キャプタン	800	67.6	3.0	1.0	0	1.0	1.0
ダイカモン	500	30.6	25.0	1.8	0	0	4.0
ポリキャプタン	1000	12.3	4.9	1.0	0	1.2	1.2